平成３０年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」成果報告書

団体名	国立大学法人群馬大学

Ⅰ　概要

１　選択したテーマ

テーマ	取組項目	選択
①交流及び共同学習を継続的な取組とするために、教育課程への位置付け等、組織的かつ計画的な取組の在り方に関する研究	（ア）通常の学級に在籍する全ての児童生徒等に交流及び共同学習の機会を学校として計画的に実施するための方法に関する研究	○
	（イ）障害のある児童生徒及び障害のない児童生徒等が、交流及び共同学習を通じ、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むために、交流及び共同学習のねらい、事前学習と事後学習、年間指導計画への位置付けの効果的な工夫に関する研究	○
	（ウ）通常の学級の担任などの教職員が主体的に交流及び共同学習に取り組むための体制整備の在り方及び教職員の意識向上に関する研究	○
	（エ）ＩＣＴを活用した交流及び共同学習に関する研究	
②学校間交流や居住地校交流等を進めるための関係する教育委員会との連携の在り方の研究	（ア）特別支援学級が設置されていない小・中学校における学校間交流を推進するための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（イ）高等学校おける学校間交流や居住地校交流を進めるための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（ウ）学校間交流や居住地校交流等を進めるための市町村教育委員会と都道府県教育委員会又は市町村教育委員会と市町村教育委員会の連携に関する研究	
	（エ）居住地域の小・中学校等に副次的な籍を置くなど、居住地域との結びつきを強める工夫に関する研究	
③障害のある大人の人との交流や地域における高齢者等の世代を超えた交流の在り方に関する研究	（ア）障害のある大人の人との交流に当たり、福祉部局や社会福祉法人等と連携したネットワーク形成に関する研究	
	（イ）教育委員会と地域の関係者による「心のバリアフリー連絡協議会（仮称）」を設置し、取組状況や実施体制などの成果と課題について協議するなど、地域に心のバリアフリーの意識を啓発し根付かせるための研究	
	（イ）高等学校の生徒や特別支援学校の高等部の生徒が、継続的に地域の障害のある大人の人との交流をするための方策に関する研究	

２　事業概要

・本事業は、群馬大学教育学部子ども総合サポートセンターが中核となり、教育学部附属学校園（幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校）が協働して、図画工作科あるいは美術科における交流及び共同学習のモデル授業を開発、実施、評価するものである。
・本事業の目的は、通常の学級に在籍する園児児童生徒と障害のある園児児童生徒とが教科の交流及び共同学習を継続的に実施できるようにすることである。また、交流及び共同学習実施前後の子ども達、教師の意識や考え方の変容を調査し、その効果を確かめていく。
・取組の内容は、幼稚園・小学校・中学校の12年間、特別支援学校では小学部から高等部までの12年間を見通したモデル授業の開発・実施・評価を行うことである。
・モデル授業の開発、実施、評価に当たっては、群馬大学教育学部を中心とした有識者からの指導や助言を受けつつ、各学校園の教員が協働して、題材や単元の新規開発や実施、これまでの実践の追試を行い、それぞれの実践の評価を蓄積していく。
・実践の評価の蓄積から、あらかじめ各学校園の年間指導計画にモデル授業の実施を位置付け、次年度に向けてさらなる計画的・継続的な取組につながるようにする。
・児童生徒、各学校園の教員に対するアンケート調査を実施する。児童生徒に対しては、交流及び共同学習をとおした相互理解の変容、教員に対しては、教科における交流及び共同学習についての理解や実践をとおした成果や課題、園児児童生徒の意識変化などについて調査する。
・これらの取組を、成果物としての報告書にまとめ、県内の小中学校や特別支援学校、全国の附属学校へ発信するほか、群馬大学子ども総合サポートセンターの主催の研修会等をとおして、学外に普及する。

３　事業の成果

【幼稚園と特別支援学校】　特別支援学校小学部児童と幼稚園年長クラスによる交流及び共同学習を行った。絵本の読み聞かせや絵の具遊びなどの活動をとおして、それぞれの園児児童が表現の仕方の違いや共に活動する楽しさに気付きながら、多様な考えや表現の仕方を受け入れてかかわり合うことができた。実施後には、大学生による音楽鑑賞会を合同で実施し、行事交流をとおして更にかかわりを深めることができた。
【小学校と特別支援学校】　過年度までに開発、実施した授業を追試行するとともに、低・中・高学年において、１から複数の教科書題材を両校教員がアレンジして交流及び共同学習を新規に開発し、実施した。このようにして、６年間をとおしたモデル授業を蓄積することができた。
【中学校と特別支援学校】　中学校１年生と特別支援学校中学部生徒との美術科における交流及び共同学習を開発、試行した。中学１年生は小学校段階からの交流及び共同学習の経験がある生徒が多く在籍している。そこで、発達段階を考慮し、題材開発においてはワークショップ形式の活動を取り入れた。これまでの経験で培った生徒同士の関係性を生かしながら造形活動を行うことで、個々の思いや表現の仕方を互いに認め合い、それぞれの作品の良さを共有し合う姿が見られた。
　以上により、過去の実践例を加え、幼稚園１年、小学校６年、中学校１年の計８年をつなぐ創作的な遊びや図画工作科・美術科の交流及び共同学習実践モデルをまとめた。

各学校園における交流及び共同学習の実施後に行ったアンケートからは、以下のような児童生徒や教員の意識や考え方の変容をとらえた。

【児童生徒の変容】

・特別支援学校の児童と初めてかかわる際に驚いて泣いてしまう園児がいたが、回を重ねるごとに、自分からかかわっていこうとする園児の姿が見られた。

・小学校低学年段階や初めて特別支援学校の児童とかかわる際には、「お世話をする、される」という関係性が強くみられるが、交流及び共同学習の実践を積み重ねた小学校高学年段階やかかわる回数を重ねていくことで、自然なかかわりが生まれ、互いの活動の様子から新たな考えを生み出したり、思いを共有したりする姿が見られた。

・中学校段階では、特別支援学校生徒に対して「面白い子」「頑張っている子」ととらえている生徒が多いが、交流及び共同学習後には「また一緒に学習したい」「違う活動にも一緒にチャレンジしたい」という共に学ぶ仲間としてとらえる生徒が増えている。

【教員の変容】

・本事業に取り組んだことで、これまでの行事交流から教科における交流及び共同学習をさらに推進する意識が高まった。

・これまでに交流及び共同学習の実践に取り組んでいなかった教員と実際に取り組んでみた教員とでは、後者の教員のほうが交流及び共同学習の実感をもってその効果をとらえ、児童生徒や保護者等の変容を見取ろうとする意識が高くなる。

【保護者の変容】

・中学校段階では、生徒が交流及び共同学習の授業について家庭で話す内容から、保護者自身が自分の子どもの感じ方の変容をとらえ、相互理解が推進されたことを実感している。

４　事業の課題とその解決のために必要な取組

今年度の課題として、３つの課題を見出した。

・短期間で新規のモデル授業の開発、実施、評価を行った実践については、十分な事前事後学習をとおして交流及び共同学習を実施する必要があること。

・中学校と特別支援学校における美術科の交流及び共同学習の評価を受けて、中学校段階での交流及び共同学習の拡充の可能性を検討すること。

・群馬大学教育学部附属学校園における、通常の学級に在籍する園児児童生徒と障害のある園児児童生徒の教科の交流及び共同学習の成果を、地域の学校での実践につなげていくこと。

これらの課題を解決するために、今年度の各学校におけるモデル授業の開発、実施、評価を整理し、個別の指導計画や各学校の教育課程との関連を踏まえたカリキュラムマネジメントをとおして、年度当初から年間指導計画に位置付けられるようにする。計画的にモデル授業を年間指導計画に位置付けることで、中学２年生段階での新規の題材又は単元の開発、実施を試みる。

今年度の取組の成果を地域の学校での実践に生かすためには、特別支援学校で行っている居住地校交流において、開発した題材又は単元を実施することが期待できる。また子ども総合サポートセンターの研修機能を活用し、群馬県内の学校を中心に実践の発信を行うようにする。